

銭を運ぶ連歌師

—日記・紀行文を資料として—

鶴崎裕雄

一 銭の取り持つ公家と連歌師

『業平餅』は、歌の名手在原業平が和歌の神様玉津島明神に参詣する途中、道端で餅を売る亭主に餅を所望する狂言である。

業平 して、その餅は誰なりと望む者があれば与ゆるか。

亭主 イヤおあしさえお出しなされるれば、上げますか。

業平 ウーン何、足を出せばくるるか。

亭主 さようでござる。

業平 それならばその餅をくれい。まず足を出そうぞ。

亭主 イヤそのことではござらぬ。料足のこととござる。

業平 イヤ片足出すも両足出すも同じことじゃ。ソリヤ出い

たは。

亭主 これはいかなこと、上つ方じゃによってござんじない

はごもつともでござる。私の申しますのは、鳥目のこととござる。

業平 そのようなさもしい物は持たぬ。餅の代りに歌を詠うでとらしょう……（後略）

公家の業平は銭を知らないという設定で笑いは進行する。業平にとつて、おあし（お足）・料足（両足）・鳥目と呼ばれる銭は「さもしい物」である。亭主は身分の高い「上つ方じゃによつてござんじないはごもつともでござる」という。これはあくまでも狂言であつて、実際には公家たちも銭を大切にし、大いに関心を持った。主人公の業平は古代、平安時代の人物、本稿で述べる連歌師は中世、室町時代から戦国期に活躍した人々である。

奈良興福寺の最高位の別当職であつた大乘院尋尊の日記『大

乗院寺社雜事記』寛正六年（一四六五）四月一六日条に、

宗祇来、対面、

文正元年（一四六六）閏二月一〇日条に、

宗祇来、対面、此間吉野花一見云々、

と見える。それ以後、宗祇が尋尊の許を訪ねるのは文明元年

（一四六九）七月のことであるが、この文明元年までの間に、

応仁元年（一四六七）五月、応仁の乱が勃発した。京都の公家たちは戦乱を避けて一族の子弟が入っている奈良の寺院に疎開した。尋尊の父一条兼良も大乘院の塔頭成就院に乱を避けて居住していた。¹⁾

文明元年七月一日条に、

宗祇自東国上洛、参申殿下、

文明元年七月一三日条に、

殿下渡御、御連歌在之、宗祇参申、無殊儀者也、

とある。宗祇はこの頃、盛んに東国・関東地方に下向しており、文明三年一月から四月と六月の両度にわたって東常縁より古今伝受を相伝した。

同じく『大乘院寺社雜事記』文明五年一〇月八日条に、

御連歌在之、宗祇参申、予・得業同道了、宗祇五百疋進上

之云々、

とある。「御連歌」とあつて成就院での兼良主催の連歌会で、尋尊と得業（政覚、せいかく、二条家出身、尋尊の付弟、後、大乘院門跡、興福寺別当）も出座した。この日、宗祇は兼良の許へ錢五百疋を進上した。「云々」とあるので、兼良から聞いた話であろうが、五百疋は高額であつて、尋尊はわざわざ日記に書き留めたのであろう。

しばしば連歌師たちは公家や門跡を訪ねては金品を進上している。例えば朝廷の記録保管の官務職の壬生雅久の日記『雅久宿禰記』延徳二年（一四九〇）一月四日条（『大日本史料』）に、
文庫破損、上葺無正牀者也、仍種玉庵宗祇為合力料足千疋送進之、家君御祝着至極也、誠以不思議芳恩也、……此乞食僧致此沙汰之条、希代事也、

と記している。宗祇は官務文庫修理のために壬生雅久に千疋の進上を申し入れた。一方、「此乞食僧」という記述が気に掛かる。後世、江戸時代には宗祇は身分の低い出身といわれるが、このことについての関連は不明である。後世、松永貞徳の『戴恩記』（岩波古典文学大系98）には、

古今は……称名院殿は、（三本西公条）かれは乞食の客なればとて、御ゆるしなき也。

とある。三条西公条（称名院）は「乞食の客」なればとて連歌

師紹巴には古今伝受を授けなかったというのである。「乞食の客」の解釈には様々あるが、やはり公家からは身分の低い者として見なされたのであろう。

公条の父三条西実隆の日記『実隆公記』文龜三年（一五〇三）四月一八日条に、

玄清法師来、古今切昏事小々所望之間、聊有示事等、表其禮鶯珠持来之、不慮之事也、仍扇、杉原等遣之了、とある。「鶯珠」や「鳥目」「鶯眼」は錢の真ん中に穴（四角い穴）があいていることから鳥（鶯鳥）の眼に見立てた錢の別称である。

『実隆公記』享祿二年（一五二九）四月二八日条に、
午後參内、古今集第廿誦申之、切昏少々備叡覽、則申出退
出、追而可調進上也、……勾当内侍来臨、十帖引合・折昏三言雖左道祝言計之由被命之、無為終功御祝著之由再三勅
定云々、帥段子一端・引合十帖同拝領、千万過分之由申之、
天文二年（一五三三）正月二三日条に、

事了、今日古今切昏事大略相伝、献折昏二百定
とある。撰政太政大臣を務めた近衛尚通の日記『後法成寺関白
記』天文五年四月一七日条から八月二二日条には尚通が連歌師
印政に古今和歌集の解釈を行い、古今伝受を授ける記事が見ら

れ、その年の十一月一三日条に、

印政昨日千疋綿進之、切昏三通遣之。
とある。この「千疋」は錢か綿の単位か、定かではないが、『古
今和歌集』や古今伝受に関連する記事を抽出してみた。公家社
会にも錢は礼物として使われ、公家と連歌師の間を取り持った
のである。

二 錢の収入源

こうした宗祇たち連歌師の錢の収入源はどうなっていたのだ
ろうか。何処でどのようにして取得したのであるか。宗祇の
高弟宗長の紀行『宗長手記』（島津忠夫校注『宗長日記』岩波文庫）
の大永六年（一五二六）三月に駿府（静岡市）から上洛の途中、
三河国刈谷（愛知県刈谷市）の水野和泉守亭に立ち寄り、
かりや水野和泉守宿所。

かぜや春磯の花さくおきつなみ

とあり、一年後、大永七年四月、駿河への帰途、水野氏を再訪し、
三河荊や水野和泉守。兩日逗留。にはかた 俄一折興行。
はるはくれぬほと、ぎすはた初音かな
みやげにとて五百疋、去年のぼりしにも千疋はなむけ、

以下の芳恩惣じて此年来万疋におよび侍らむ。おそろし
く。

と記す。連歌師たちが地方武士を訪ねると、餞別の金銭が贈与された。宗祇の場合、『古今集』講釈（古今伝受）という特別の収入源もあつたであろう。

中世、特に室町時代、武士をはじめとする地方の富裕層は都の文化を取得することに熱心であつた。雅の世界に憧れたのである。その一つ、蹴鞠も代表的な都の公家文化である。文明一五年（一四八三）甘露寺親長は弟の相国寺の僧龍首座が遣明船の居座として泉州堺の港を出発するのを見送りに行つた。居座は遣明船の責任者で禅僧や儒学者が選ばれた。龍首座は文明八年の遣明船にも乗船しており、渡明の経験者であつた。『親長卿記』には、弟を見送るため親長は二月二十七日京都を出て、天王寺・住吉に詣でて、二八日に堺に着き、その日から連日のように「有鞠」の記事が記されている。二五日条には、

小嶋三宅彌三郎来、尋鞠故実、

とある。彌三郎はただ蹴鞠を見るだけでなく、鞠の故実を尋ねている。蹴鞠についての故実を習おうとしている。親長が「有鞠」というのは蹴鞠を見せたというだけでなく、蹴鞠について教授したというのであろう。このことは次に述べる『言継卿

記』からの類推である。親長は蹴鞠を指導することによって幾ばくかの謝礼を得た。それも錢によつて支払われたと思う。

もう一つ、堺における『親長卿記』に興味深い記事がある。三月六日条に、

今日予書付太刀三振分書付渡鎮藏主・本藏主了、用脚千疋借用、龍首座令用意太刀、令渡唐也榻脚返遣也

とある。千疋借金をして日本刀一二振を都合した。渡明する船に託して中国の物品と交換し、それが帰朝の時には倍になつて返つてくるというのである。弟を見送るついでに蹴鞠の指導料を稼ぎ、貿易の余力にも預かるうというのである。これらすべて錢によつて支払われ受け取られたことと思われる。

三 公家の蹴鞠教授の旅

蹴鞠について、もう少し公家と錢の関わりを眺めておきたい。山科言継の『言継卿記』（史料纂集）天文二年（一五三三）七月から八月にかけての記事である。「蹴鞠伝受」とでもいうべき言葉があるかどうか知らないが、公家の飛鳥井雅綱と山科言継が尾張に下向し、守護代織田達勝や信長の父織田信秀の被官や同名衆に蹴鞠や和歌を伝受し、錢の収入を得た。これについ

て、今谷明氏は「歌鞠伝授という名目で朝廷の許可を得て下向したもので、旅というより、地方稼ぎの一種であった」と評しており、小川剛生氏も平成二九年一月の早稲田大学での和歌・説話・仏教の三文学会の合同シンポジウムで注目すべき資料として注意を促した。⁽³⁾

例えば、雅綱・言継と雅綱の家司藏人の三人が尾張に下着して九日目の七月一六日条に、

十六日、丁巳、天明、八時、八時分夕立、○花井又次郎源元信飛鳥井門弟に成候、

太刀^系、式百疋持来、杵迄云々、矢野石見守寛倫同門弟に

成候了、太刀以下同前、○三郎来、飛鳥城へ同道候了、予、藏人可

来之由使有之、兩人罷向、切廻にて一盞候了、○三郎に勅

筆^二枚、青門御筆^二枚、詩歌を遣候了、

とある。花井元信・矢野寛倫は織田氏の家臣で、雅綱と子弟の契約を交わし、いわゆる束脩^{そくじょう}として太刀と二百疋を持参した。

「杵迄」とあり、七月二六日条には「葛袴迄」とある。「杵」や

「葛袴」などのグレードがあつて、グレードに従つて銭や礼物

に差があつた。⁽⁵⁾この後、信長の父の織田三郎信秀が来て居城の

勝幡城^{しよばた}(津島市)で酒と切廻の饗応を受け、雅綱たちは後奈良

天皇と青蓮院門跡の直筆の詩歌を贈呈した。こうした歌鞠伝受

を見ると和歌の古今伝受にもグレードがあつたのかと思われる。

『言継卿記』天文二年蹴鞠謝礼銭一覧表 天文二年(一五三三) 七月〜八月

人名を以下に省略、飛||飛鳥井雅綱、予||山科言継、藏||飛鳥井家司藏人、三郎||織田信秀(信長父)、大和||織田大和守(守護代織田達勝)。蹴鞠以外の文芸・芸能、「歌道門弟」「風流」「碁」などに注目。

7月

2 京都出発「尾州へ下向也」、近江国坂本泊。

3 乗船、守山より近江武佐(近江八幡市)泊。

4 人夫調達のため武佐長光寺逗留。

- 5 永源寺（東近江市）泊。
- 6 八風峠越、伊勢国梅戸（いなべ市）泊。
- 7 桑名（桑名市）泊。「今日可乗舟處、潮時悪く逗留」
- 8 桑名より乗船、尾張国津島着。
- 9 晩、鞠、飛・予・藏・三郎ら、見物数百人。
- 10 飛↓三郎城へ、鞠、飛・予・藏・三郎・右近ら。
- 11 朝飯以後、飛清洲へ、兵部方へ後柏原天皇勅筆進上。
- 12 大和来る。鞠、飛・予・大和・三郎ら。
- 13
- 14 三郎来る。
織田大膳亮飛門弟↓太刀糸巻・二百疋。
- 15 三郎より盆之料とて飛↓百疋、予・藏↓五十疋。
瀧川彦九郎、飛門弟↓太刀糸巻・二百疋、沓迄云々。
花井又次郎、飛門弟↓太刀糸・二百疋、沓迄云。矢野石見守、門弟↓太刀糸・二百疋。
- 16 三郎に勅筆^{二枚}・青蓮院御筆^{一枚}・詩歌。
- 17 三郎庭一足鞠、飛・予・藏・三郎・速水・右近・花井ら。
伴九郎兵衛尉、門弟↓太刀糸・二百疋。
- 18 晩、鞠、飛・予・藏・三郎・速水・矢野・右近尉・大膳亮ら。
- 19 晩、鞠、飛・予・藏・三郎・速水・右近・花井ら。初夜風流。少将碁を差す。
- 20 音曲、太鼓・大鼓。
- 21 晩、鞠、飛・予・藏・三郎・速水・花井ら。
織田右衛門尉、門弟↓太刀持・三百疋。孫左衛門↓太刀糸・二百疋。
- 22 晩、鞠、飛・予・藏・三郎・兵部・花井ら。
- 23 三郎亭にて和歌会、飛・予・藏・三郎。
今川竹王丸、門弟↓太刀糸・三百疋、沓迄。織田與三郎↓太刀糸・二百疋。
- 晩鞠、飛・予・藏・竹王丸・三郎・兵部・花井・滝川ら。

24 鷹狩。

25 晚鞠、飛・予・竹王丸・三郎・速水・大膳亮・花井ら。

矢野善十郎、門弟↓太刀^糸・二百疋、また歌道門弟↓太刀。

26 晚鞠、飛・予・藏・竹王丸・三郎・速水・大膳亮・花井ら。

渡部玄蕃助、和歌・蹴鞠門弟↓太刀・馬一疋・五百疋、杵・葛袴。

27 朝鞠、渡部玄蕃、望、飛・予・藏・竹王丸・三郎・速水ら。

林新五郎、門弟↓太刀^糸・二百疋。

28 大和所へ、鞠、飛・予・藏・大和・三郎・右近・大膳ら。

千秋左近將監(熱田神人)門弟↓太刀^糸・二百疋。林光院、歌道門弟↓百疋。

8月

1 2 晚、鞠、飛・予・大和・速水・右衛門尉・毛利・矢野ら。

大和、飛・予・藏に太刀にて礼。飛・予・藏も大和に礼(八朔の礼か)。

3 大和所で鞠、飛・予・藏・大和・速水・矢野・右衛門尉・毛利ら。

篠田入道、歌道門弟↓百疋。

4 晚、鞠、飛・予・藏・大和・三郎・速水・右衛門尉・大膳亮ら。

名古野又七、門弟↓太刀^糸・二百疋、坂井撰津守↓太刀^糸・百疋。

出家両三人、歌道門弟↓百疋。

5 7 三郎・毛利・矢野来る。

8 飛、所労。

9 飛、所労。

10 飛、所労。

11 飛、所労。

12 飛、所労。

13 飛、所労。

14 飛、所勞、大和見舞。

15 飛、所勞。

16 織田與三郎に葛袴。

17 雨のため上洛を二〇日に延引。

18 武衛(義敦)息義統へ鴨沓・葛袴・八境圖・免状。
勘解由小路、門弟↓太刀[※]・千疋。

19 織田監物、門弟↓太刀[※]・馬代三百疋、沓・葛袴。
餞別に大和、飛へ太刀^持・馬一疋・五千疋。
帰国前、各所より品々の餞別。

20 各所より餞別。

21 雨のため洲侯(大垣市墨俣町)逗留。飛・予、織田右近らと贈答歌。

22 墨俣より垂井(岐阜県垂井町)着。

23 垂井より朝妻(米原市)着。

24 朝妻より乗船、坂本着。

25 京都有着、帰宅。

今谷氏が評するようにこの飛鳥井雅綱・山科言継の旅は「地方稼ぎ」である。尾張滞在中、雅綱が発病し、「所勞」となったので、どこまで予定の稼ぎを果たせたか判らないが、はなはだ興味深い記録である。さらに注目したいのは「歌道門弟」である。雅綱・言継は蹴鞠の他に和歌についても門弟を取って指導をした。この指導、いわゆる「古今伝受」とはどう違うのであろうか。蹴鞠の流れで『親長脚記』『言継脚記』を見たので

あるが、『言継脚記』に「歌道門弟」とあるのに気付いた。これまで幾度も読んだ日記であるが、表にして初めて気付いたことである。地方における公家のこうした歌の指導は宗祇や堯恵の伝受とどのように違うのであろうか。すでに研究があるのかも知れないが、今後の研究課題としたい。

四 金品を運ぶ実態と不安

中世、日本の貨幣は金・銀・銅（青銅＝銭）の三貨制であったが、実際には中国から輸入された渡来銭が広く使われていた。銭は、真ん中の穴に紐を通した縹銭（さしだに）にまとめられていた。東京の日本橋にある日本銀行金融研究所貨幣博物館には縹銭の模造品が展示されていて、銭の重さは一枚＝約三・五（グラム）ほどで、一〇〇枚単位で一つの縹銭となっている。⁽⁶⁾

遠隔地への銭を送る手段としての為替制度は、すでに中世、一三世紀に見られるというが、どうも実態はよく判らない。むしろ絵巻物などに銭の穴に紐を通した縹銭を縁先で数えたり（『山王靈驗記絵巻』久保惣記念美術館）、牛車に積んだりして（『平家物語絵巻』林原美術館）運ぶ様子が描かれている。

銭ではないが、『吉川家文書』には金貨（金子）が運ばれる記録がある。天正一八年（一五九〇）七月、小田原城落城後、金子を京都の聚楽第に運ぶため、清洲・星崎両城在番の小早川隆景や岡崎城在番の吉川広家に運搬の人足（人夫）の追加を命じる勝利者豊臣秀吉の朱印状である。⁽⁷⁾

金子三千枚并御物等聚楽へ被差上候、然（著）人足事、
最前被仰出候外（二重）百人、一柳越後守・新城駿河守

兩人、可相渡候、人足兼日令用意可相侍候也、

七月十五日

（豊臣秀吉朱印）

羽柴筑前侍従とのへ

羽柴新城侍従とのへ

規模は比較にならないが、連歌師たちも人夫を雇って銭を運んだ。各地を廻る連歌師が取得した金品を一纏めにして自宅に送る記録がある。

天文一三年（一五四四）九月、連歌師宗牧は京都を發つて奥州の入り口白川の関一見の旅に出た。『東国紀行』の旅である。宗牧は、近江の六角氏、北伊勢の員弁川流域の国人たち（北方一揆）、尾張の織田氏、再度伊勢に入つて浜田（四日市市）の田原一党、伊勢湾を渡つて三河岡崎・深溝（幸田町）の松平諸氏・西郡（蒲郡市）の鶴殿氏、豊川の牧野氏を訪ね、次ぎに富永（新城市）の菅沼氏の許に向かう前、これまでに取得した錢別の品々を纏めて都に送る記事が見える。

……こゝろの錢ども難謝事なり。行末は所用もあるよしにやなど。都の不弁もいかにと。孝清・孝順とりもちて西郡へつかわしたり。鶴殿辺懇志のものども一つになど申あはせたり。おもひもよらぬ事どもなり。

とある。都に送る品物の中に銭が含まれていたか判らないが、

連歌師は地方で贈られた品々を纏めて都へ送ったことが窺われる。菅沼氏を訪ねた後は駿河国に入る。孝清や孝順は三河の連歌師のようで、駿河に入ると別れたのであろう。宗牧は都に送る物品の手配を孝清・孝順に頼んだのである。

広橋兼顕の『兼顕卿記』文明九年（一四七七）九月二日条に、

自南都有便宜、禁裏七十番御歌合一卷、自禅閣加判詞、去月中旬比進之処、於路次敵陣足輕奪取云々、仍禅閣自筆中書到來……

という記事がある。禁裏で行われた七十番歌合の判詞を奈良に住む一条兼良に頼んだところ、判詞が都へ送られる途中、盗難に遭い、兼良は再度、判詞を書いて送ったというのである。『大乘院寺社雑事記』同年（文明九年）八月二日条に、奈良に下向した宗祇が兼良の連歌に出座した記事があるので、伊地知鐵男氏は、この時、禁裏の依頼を受けて七十番歌合と判詞を運んだのは宗祇で、帰洛途中、盗難の被害に遭ったと推測されている。^⑧「於路次敵陣足輕奪取」とある「敵陣」が具体的に何か判らないが、不安な道中を伝える資料である。

五 室町時代貨幣（銭）研究の現状 —あとがきに代えて—

近年、中世の貨幣に関わる研究、特に考古学に関わる研究が進んだ。^⑨昭和六一年から平成三年（一九八〇年代後半〜九〇年代前半）日本は好景気時代を迎え、高層ビルの建設が盛んに行われた。ビルの建設には考古学的調査が義務づけられている。特に東京では江戸時代の幕府機関や大名屋敷跡の発掘から貨幣が大量に出土した。また堺や博多などの中世都市の発掘調査が行われ、埋蔵されていた銭の研究や渡来銭による偽造施設が発掘されている。

平成三〇年四月、私は埼玉県蓮田市教育委員会に行き、同市黒浜の「新井堀の内遺跡」の古銭埋蔵の大甕の発見について尋ねた。現地の『埼玉新聞』三〇年三月一〇日の記事を紹介する。県埋蔵文化財調査事業団は9日、蓮田市黒浜の「新井堀の内遺跡」の館跡から、推定26万枚の埋蔵銭まぐさごせんが発見されたと発表した。単体の甕に納められた銭の枚数としては国内最多とみられる。事業団の塩野谷孝志理事長は「埋設された当時のままの状態で見つかり、石蓋や木簡も伴っているのが全国的にも貴重な発見」と話している。

事業団によると、埋蔵銭の容器は15世紀前半に作られた常

滑焼の大甕。口径約60センチ、胴部の最大径94センチ、高さ約74センチで、推定容量は約280リットル。甕の中には縦7・5、横7・5センチの木簡があり、「二百六十」の文字が記されていた。1貫で約1千枚を意味する「くわん」もしくは「貫」の文字が書かれている可能性もあるという。甕の容量と木簡の文字から、事業団は銭について「約26万枚の可能性もある」と見解を示し、14年から鑄造された「永楽通宝」が数多く確認されていることから、「埋蔵時期は少なくとも15世紀以降と考えられる」としている。

単体の甕から発見された埋蔵銭の最大規模のものとしては、神奈川県鎌倉市の浄智寺で約18万枚が見つかっている。事業団によると、銭を埋蔵する目的として、呪術的、宗教的な理由や財産保全などが考えられるという。

新井堀の内遺跡は蓮田市の南東部に位置し、周囲には館跡が分布する。県道の建設工事に伴い、2017年10月から事業団が遺跡の発掘調査を実施。12月25日に地表から深さ約2メートルのところで、甕に載せられた直径約66センチの石蓋を発見した。今後の調査分析や保存方法などについては、関係機関と検討、協議するとしている。

熊谷市船木台の県文化財収蔵施設では14日～18日に、埋蔵

銭を特別公開する。

とある。この新井堀の内遺跡は太田道灌の家臣の館跡という。道灌は宗祇と同時代の人物で連歌も同席している。宗祇は地方豪族から銭を貰い、それを一条兼良たち公家の許に運んだ。こうした行動に関わって連歌会が催され、古今伝受を含む和歌の講釈が行われたのである。

本稿の執筆中、蹴鞠の指導とともに歌道を教授する公家たちの存在を知った。この和歌の講釈といわゆる古今伝受とどのよ

うに違うのであろうか。新しい興味が湧く思いである。

本稿は、平成三〇年七月二八日福井県一乗谷博物館での戦国織豊期研究会と同年一〇月七日國學院大學での和歌文学大会で行った研究発表を合わせたものである。当日、ご質問・ご意見をいただいた方々にお礼申し上げます。また執筆にあたり、貨幣博物館の湯川紅美氏、大阪狭山市の池の博物館の西川寿勝氏、摂河泉地域文化研究の小林義孝氏より種々ご教示を得た。小川剛生氏のご論考から新しい関心を受けた。お礼申し上げます。

〔注〕

(1) 鶴崎裕雄「応仁の乱期の『大乘院寺社雑事記』に見る芸能文化」『藝能史研究』174、'06、7、鶴崎裕雄「『大乘院寺社雑事

記』に見る連歌興行(三)―応仁元年(二四六七)―文明九年(一四七七)―『大乘院寺社雜事記研究論集』三、和泉書院'06。

(2) 中世都市界と宗祇について、鶴崎裕雄「堺伝受の一流―連歌師宗祇の場合―」『調査報告』38 国文学研究資料館'13と重複がお許し頂きたい。

(3) 今谷明『言継卿記公家社会と町衆文化の接点』そしえて'08。

(4) 小川剛生「戦国時代の文化伝播」の実態―十六世紀の飛鳥井家の活動を通して―『幻想の京都モデル』中世学研究会'17。

(5) 蹴鞠の研究については、渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究―公家鞠の成立―』東京大学出版会'94、村戸弥生『遊戯から芸道へ―日本中世における芸能の変容―』玉川大学出版部'02、稲垣弘明『中世蹴鞠の研究―鞠会を中心に―』思文閣出版'08などを参照した。

(6) 図録『おかねの道中記』日本銀行貨幣博物館'12。

(7) 『愛知県史』資料編'07、同通史編3 中世2 織豊'18。

(8) 伊地知鐵男『宗祇』青梧堂'43(伊地知鐵男著作集'96 汲古書院)。

(9) 近年の貨幣(銭)の研究については、鈴木公雄編『貨幣

の地域史』岩波書店'07(04の鈴木公雄(66歳)没後に刊行)、川戸貴史『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館'08、高木久史『通貨の日本史』中公新書'16、川戸貴史『中近世日本の貨幣流通秩序』勉誠社'17などを参照した。

(つるさき ひろお／帝塚山学院大学名誉教授)